

私の奇跡体験

私は小学校の教員を40年務めました。

私は長年、特別支援学級の担任を務めており、50代で最後の転勤となった新しい学校に赴任して間もない、5月のことでした。

その学校の特別支援学級は、6人の教員と30人の子供達がありました。

私の担任していた児童の中には、非常に乱暴で、毎日のように喧嘩や他の児童への暴力を繰り返し、盗みや嘘も絶えず、刃物を持ち歩くAくんという子がいました。ほかの子どもたちはその二人を恐れながら毎日を過ごしていました。

5月の連休明け、主任と5年生担任の二人が2泊3日の宿泊学習で不在にしていた時のことです。毎日のように喧嘩の仲裁をしていた私に、Aくんがボクシングのようなノリで、渾身の一撃のパンチを目に打ち込んできたのです。

血がだらだらと流れ、私は一瞬倒れましたが、逃げていくその子を追いかけました。

ところが、めまいがして再び倒れ込み、近くにいた子どもに男性教員を呼んできてほしいと頼みました。

ちょうど給食の配膳中で、「今は忙しくて行けない」と言われたと戻ってきたため、「職員室の先生なら誰でもいいから呼んできて」と、再びお願いしました。

やっと来てくれたのは養護教諭でした。視界もはっきりしない中、手を引いてもらいながら保健室へ向かいました。

校長は落ち着いた様子で状況を尋ねてきました。

私は吐き気もあり、目も見えず、激しい痛みの中でショック状態でしたが、必死に事情を説明しました。

急遽眼科で診てもらおうと、瞳孔を動かす筋肉が切れており、瞳孔が開いたままの状態になっていました。

さらに、眼球内の水分が漏れているため、強い痛みが出ているとのことでした。目の周りはどす黒く、赤紫から次第に深い紫、そして黒へと変わっていき、痛みや鼻の怪我也も重なり、人前に出られる顔ではありませんでした。

メガネをかけていたことが不幸中の幸いで、もししていなければ視力を失っていた可能性があると言われました。

2～3日は痛みで眠れず、食事も取れない状態でしたが、その間も私は、怪我をさせたAくんのことを気にかけていました。

後で聞くと、その子は翌日も普段通り登校し、特に注意も受けていなかったそうです。

その話を聞いたとき、怒りが込み上げてきました。

どうしてなのだろうと思いました。これほどの暴力があっても何のお咎めもなく、誰からも注意されずに過ごしている。それはその子にとっても良いことではないはずですが。しかし私は心身ともに傷を負い、そこまで行動を起こす余裕がありませんでした。

それまでその子を心配していた気持ちは、次第に怒りや恨みに変わっていきました。

振り返れば、乱暴な子や対応の難しい子を任されたこと、人数配分や仕事の分担なども、最初から無理のある配置だったのかもしれませんが。「ベテランだから任せる」という名目で、実質的には押し付けられていたように感じました。

私は目も見えず痛みも強かったため、3週間ほど休みをいただきました。その間、毎日のように眼科に通いながら、私が信仰している教会にも通い、苦しい胸の内を打ち明け、回復を祈っていました。

校長をはじめとする教員の態度に対する怒りは抑えきれず、その思いを信仰している神様に素直に語ることで、なんとか心を保っている毎日でした。

ある日、祈願を終えて職員の方と話していたときのことで。

その方が「あら、何これ？自分の顔を見てみて。」と言いました。

近くの方から小さな鏡を借りて見ると、目の周りの黒紫の内出血が、みるみるうちに肌色へと変わっていったのです。

よく見ると、黒い部分が1ミリ四方ほどの小さな四角に分かれ、まるでモザイクのように、その一つ一つが順番に肌色へと変化していきました。見ている間にも、どんどん黒から肌色へと変わっていったのです。

それは私一人だけでなく、その場にいた周りの人たちも一緒に見ていました。

神様のもとで、「責めるだけでは誰も救われない」と自分の心の中で変化が起きた直後の、不思議な体験でした。

これまでもさまざまな不思議な体験をしてきましたが、他の人にもはっきりと見える形で起きたものとしては、この出来事が一番印象に残っています。

奇跡とは形や環境の変化ではなく心の変化や心が救われることなのだと改めて思いました。